

環境デザインの国際ワークショップ開催に向けた坂出市に関する基礎調査

BASIC RESEARCH ON THE CITY OF SAKAIDE AS THE PREPARATION FOR AN INTERNATIONAL WORKSHOP OF ENVIRONMENTAL DESIGN

川北 健雄 芸術工学部環境デザイン学科 教授
長濱 伸貴 芸術工学部環境デザイン学科 准教授
宮本 万理子 芸術工学部環境デザイン学科 助教
中村 卓 芸術工学部環境デザイン学科 助教
長野 真紀 大学院芸術工学研究科 助教
岡村 光浩 基礎教育センター 准教授
小菅 瑠香 帝塚山大学現代生活学部居住空間デザイン学科 准教授

Takeo KAWAKITA Department of Environmental Design, School of Arts and Design, Professor
Nobutaka NAGAHAMA Department of Environmental Design, School of Arts and Design, Associate Professor
Mariko MIYAMOTO Department of Environmental Design, School of Arts and Design, Assistant Professor
Suguru NAKAMURA Department of Environmental Design, School of Arts and Design, Assistant Professor
Maki NAGANO Graduate School of Arts and Design, Assistant Professor
Mitsuhiro OKAMURA Center for Liberal Arts, Associate Professor
Ruka KOSUGE Department of Living Space Design, Faculty of Contemporary Human Life Science, Tezukayama University, Associate Professor

要旨

本研究では、近年中の実施を予定している環境デザインの国際ワークショップの準備を兼ねて、その開催候補地である坂出市の将来構想の策定とまちづくり戦略の立案に役立てるための基礎調査を行う。

古くから瀬戸内海の海上交通の要所として、また、瀬戸大橋開通後は、陸上交通における四国の玄関口として発展してきた坂出市であるが、人口減少時代を迎えて社会構造と産業構造が大きく転換しつつある今、市内では様々な問題が各所で顕在化している。その一方、島嶼部や山域部の美しい自然、平野部に広がる農地、市街地内の歴史文化資源等については、それらの価値や潜在力が、これまで十分に活用されてきたとは言い難い。

今回の調査においては、最初に地域の特色を広域的な観点から把握し、地勢的な特質から坂出市域を4つのゾーン（抱護ゾーン、中核ゾーン、臨海ゾーン、島嶼ゾーン）に区分した。その上で、現地調査および関係者へのヒアリングを通して、ゾーンごとの様々な課題ならびに多様な地域資源の分布に関する把握整理を行った。

結果として、場所ごとの多くの課題と今後の利活用がのぞまれる豊富な地域資源の存在が明らかになった。今後、新しい時代の戦略的なまちづくりの方策づくりに向けて、これらの成果を生かしていきたい。

Summary

This research aims to acquire and sort out basic information about the city of Sakaide, as a preparatory work for an international workshop of environmental design which is to be held in the following years.

The city of Sakaide has been developed since ancient times as a strategic place of sea traffic being located at the middle of Seto Inland Sea. The importance of the city further augmented when the construction of the Seto Ohashi Bridge was completed in 1988. However, now in the age of depopulation, with the drastic change of social and industrial conditions, many problems have emerged in different areas in the city.

In this research, the city area is divided into four zones according to the geographical features, namely enclosure zone, central zone, waterfront zone, and island zone. Various problems and local resources are recognized through field survey and interviews.

The result of this research will be applied not only to the following workshop but also to draw up a strategic city vision of Sakaide in the new age.

1) 研究の背景と目的

現在、日本の地方都市では経済成長を前提とした都市計画が成り立たなくなり、都市と自然を一体的・持続的にマネジメントしていく新しい環境デザインの方法が求められている。また、人口減少や産業構造の転換といった社会構造の変化に起因する問題に取り組むには、グローバルな視点から地域の価値を再発見し、広域的な関係性をふまえた解決方法を見いだす必要がある。このような状況において、環境デザイン系の国際ワークショップが、多様な視点から地域固有の問題を検討して、長期的なビジョンに基づく解決の糸口を見いだすための手法のひとつとして、近年、世界各地で実施されるようになってきている。

本学では、2009年に神戸で開催されたWAT¹⁾をはじめとして、これまでも様々な環境デザイン系の国際ワークショップに参加し、国際連携を可能とする研究教育のネットワークを構築してきた^{2),3),4),5)}。このような背景のもと、本研究では瀬戸内海に面する主要港湾都市のひとつである香川県の坂出市を対象地として、地方都市が抱える様々な課題の解決につながる国際ワークショップ開催のための準備を進めることとなった。

坂出市と本学との間には2013年に包括協定が締結され、「瀬戸内国際芸術祭」等の連携事業を実施してきた^{6),7)}。まちづくり関連の活動としては、大学院の「環境デザインプログラム」の授業の一環として、様々な地域資源や課題を把握するための現地調査を展開しており、2013年度には沙弥島、与島、小与島を対象地としたフィールドサーベイを行った。そこで2014年度の本研究では、島嶼部以外にも広く目を向けて、坂出市全体の都市構造を把握しつつ、地域再生のための様々な可能性を検討するための、より広範囲な現地調査を実施することとした。

2) 調査の概要

2014年度の前半には、文献調査を通して瀬戸内海地域における坂出市の立地条件や特性を把握し、集めた資料の一部についてはGoogle Earthで表示できるデータに加工し、ワークショップ等の際にインターネットを利用して共有することが容易な視覚的情報として整理した。(図1)



図1 坂出臨港主要部と分区指定をGoogle Earthで表示

これと併行して5月9日～5月11日には、大学院の「環境デザインプログラム」の履修学生らと共に現地を訪れて、臨海部工業地帯と島嶼部のフィールドサーベイを行った。

9月11日には、坂出市の綾市長と本学の齊木学長との間で、国際ワークショップWAT_UNESCOの開催に関する意見交換が坂出市役所において行われた。この際、齊木学長から坂出市全域を「抱護ゾーン」、「中核ゾーン」、「臨海ゾーン(海と陸の接続ゾーン)」、「島嶼ゾーン(島々のネットワークゾーン)」という4つのゾーンからなる空間構造として把握する考え方が提示された。

これに続いて10月27日には、研究代表者の川北が坂出市役所を訪れ、市役所の関係部署の方々を対象としたヒアリングを行い、坂出市のまちづくりの基本方針、活用したい地域の資源や既存施設、対応が求められる地域の課題、なんらかの事業対象となる可能性のある場所、様々な活動団体やキーパーソン等に関して情報収集した。

2015年1月11日には、本研究メンバーの川北、長濱、宮本、および環境デザイン学科の山之内が現地を訪れ、ボランティアガイドの方々に坂出市の中心市街地を案内していただくと共に、坂出商店街連合会のみなさんへのヒアリングを行った。また、3月5日～3月6日には、研究メンバーの川北と中村が2名で現地を訪れ、中心市街地および市南部の山域と田園地域の調査ならびに関係者へのヒアリングを行った。さらに3月15日～3月16日には、川北が1名で現地を訪れ、中心市街地および港湾部の調査と関係者へのヒアリングを行った。

以下にこれらの調査を通して把握した事柄⁸⁾を、4つのゾーンごとに整理して示す。(図2)

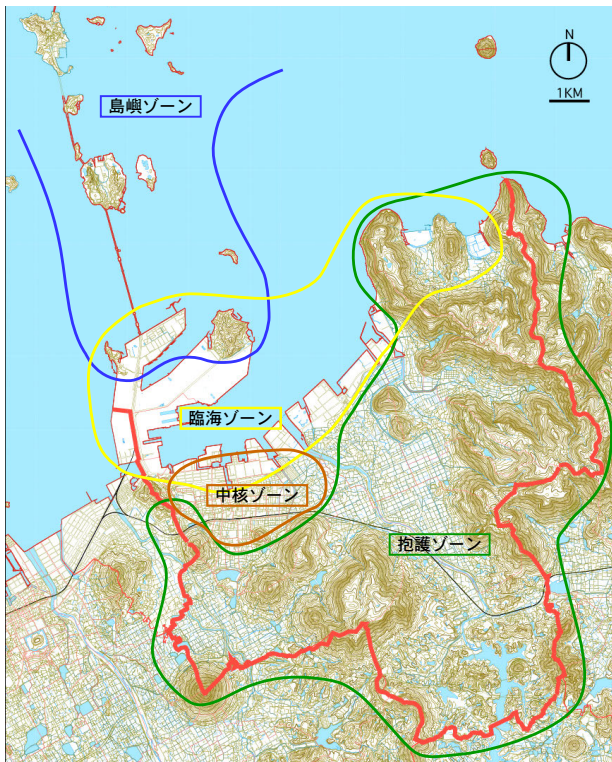


図2 坂出市域を構成する4つのゾーン概念図

3) 抱護ゾーン（山城と水系と田園地域）

坂出市域の東には標高300~400m級の山々からなる五色台、南には462mの城山、西には422mの飯野山や118mの聖通寺山が位置し、主な農地はこれらに囲まれた山裾と平野部に広がっている。南端に位置する府中湖は工業用水の確保を目的に1966年に完成したダム湖で、毎年開催されるドラゴンカヌー大会（2015年で第17回）には、全国から出場者が集まる。五色台の南には、四国八十八ヶ所霊場の第八十一番札所である白峯寺があり、第八十二番札所に至る遍路道の一部は国指定史跡になっている。

農業については、「金時イモ」「金時ニンジン」「金時ミカン」を坂出三金時と総称した地域特産品振興事業が展開されている。なかでも「金時ニンジン」は全国生産量の80%以上が香川県で生産され、その内の80%が坂出地区で生産されている。「金時イモ」（早掘りかんしょ）は鳴海金時と同じ品種であるが、冬場の「金時ニンジン」、夏場の「金時イモ」という輪作体系で生産されることが多い。「金時ミカン」と称される小原紅早生は、主に山麓部で生産されている。水田裏作としてのブロッコリー栽培も拡大傾向にある。東南アジアから多くの海外研修生を受け入れ

ている事業者もある。JAの産直店では、小規模生産者が直接農産物を持ち込むシステムが組み立てられている。

市北東部の王越地区では、過疎化と平成23年に廃校となった王越小学校の利活用が課題となっている。

4) 中核ゾーン（中心市街地）について

JR坂出駅近辺の商業地と住宅地を中心とする市街地エリアを指す。1988年に瀬戸大橋が開通して坂出港が旅客ターミナルとしての役割を失った後の商店街の衰退は著しく、周辺市街地の再整備が必要となっている。また、市立病院の移転跡地の活用、勤労福祉センターの再整備、坂出人工土地再生と市民ホールの利活用、郷土資料館等を含めた文教地区の再編、新市庁舎の建設事業、主要幹線道路の整備などが、当面の具体的課題となっている。

商店街の空き店舗対策として、チャレンジショップの設置や模擬店舗の出店イベントの開催などの取り組みが行われているが、根本的な解決にはなっていない。

一方、高校までの教育環境は比較的充実しており、県立坂出高校、私立坂出第一高校、県立坂出工業高校、県立坂出商業高校が中心部に集積し、市外からの通学者も多い。香川大学の附属小中学校も中心部にある。まちづくりとの関係では、坂出第一高校の食物科の生徒たちがイオンで月1回高校生レストランを出店している。坂出商業高校は模擬株式会社「セキレ」を年に2日間開店し、商店街での販売実習を行っている。病院と介護施設の数も多い。

なお、本町商店街から元町名店街にかけて東西に伸びる商店街は、他にないアーケードを有する遍路道として貴重な存在となっている。（図3）



図3 アーケード街を歩くお遍路さん

5) 臨海ゾーン(海と陸の接続ゾーン)について

市街地の沿岸部は、19世紀前半に大規模な塩田開発が行われ、1960年代の大規模な埋立地と共に、工業用地への転換が進められたところである。その中心にある坂出港は、現在でも四国で1番の貿易港であり、四国の自動車の76%は坂出港で荷役されている。しかしながら、広域的な集約化により衰退が進んでいる既存工場もある。コスモ石油は流通基地化されて就業人口が減少し、四国の飼料の半分を扱っていたJA西日本くみあい飼料も、岡山に統合されて撤退した。

坂出港のサイロ、倉庫群、旧港務所、一文字堤防などは、利活用がのぞまれる既存施設である。沙弥島地区では、旧小中学校の活用や万葉会館の利用率向上がのぞまれている。坂出北ICは現在、本州方面への出入りしかできないが、今後のフルインター化をめざした検討が行われている。

6) 島嶼ゾーン(島々のネットワークゾーン)について

かつて花崗岩の採石場として栄え、瀬戸大橋開通直後には、大規模なレジャー施設が立地した与島は、現在ではいずれの産業も衰退が著しく、急激な高齢化と過疎化が進んでいる。現在の与島港のプレジャーボート利用は年間百数十隻程度で、管理は地区の人に依頼して、土日だけ料金を徴収している(500円)。本来はトイレや水、食料、充電のための施設が必要だが、未整備な状況である。

旧与島小・中学校や櫃石島の漁港の遊休地、無人化したつある小与島採石場跡の活用なども課題である。

7) 総合考察

坂出市を取り巻く社会構造と産業構造は、今や大きく転換しつつあり、それにとまう様々な問題が顕在化している。今年度の現地調査では、その状況を市内各所で具体的に確認することができた。一方、今回の調査では、必ずしも十分に活用されていない、数多くの地域資源の存在についても把握することができた。島嶼部と山域部に広がる美しい自然、市内各所の空間特性と深く関わっている古代から近現代に至るまでの様々な歴史資源、地形や土壌特性に即して活用される農地とランドスケープ、そしてそれらと

関わりながら展開する様々な人々の活動等、地域再生に生かすことのできる多くの潜在力の存在を確認することができた。

今後は、これらの地域資源を今日的な課題の解決につなげるための方策を探りつつ、新しい時代のまちづくりのビジョンを構築することをめざして、さらに詳細な調査を進めると同時に、存在が明らかになった様々な地域資源を連携させつつ活用するための、戦略的な試みの可能性についても、検討を行っていきたい。

注

1) Workshop_atelier/terrain の略。CUPEUM (Chaire UNESCO en paysage et environnement de l'Université de Montréal)が運営する環境とランドスケープに関するユネスコの国際ワークショップ。2003年よりほぼ毎年、世界各地で開催されている。

2) 佐々木宏幸、川北健雄、小玉祐一郎、久慈達也、「環境デザイン教育に関する国際教育プログラムの実施方法と課題に関する研究/WAT_Kobe 2009での実践を通して」、神戸芸術工科大学紀要『芸術工学』2010

3) 川北健雄、岡村光浩、金野千恵、三友奈々、佐々木宏幸、「ユネスコ WAT_Montréal 2011への参加を通じた環境デザイン国際教育プログラムの構築と国際都市連携の実施方法に関する研究」、神戸芸術工科大学紀要『芸術工学』2011

4) 川北健雄、岡村光浩、長濱伸貴、金野千恵、「環境デザインに関する国際教育プログラムの構築について」、神戸芸術工科大学紀要『芸術工学』2012

5) 川北健雄、岡村光浩、長濱伸貴、「環境デザインに関する国際教育プログラムの構築について(その2) /二つのワークショップの比較考察」、神戸芸術工科大学紀要『芸術工学』2014

6) 佐久間華、戸矢崎満雄、藤山哲朗、林健太郎、大畑幸恵「瀬戸内国際芸術祭 2013 沙弥島アートプロジェクト by 神戸芸術工科大学」、神戸芸術工科大学紀要『芸術工学』2013

7) 藤山哲朗、藤本修三、戸矢崎満雄、さくまはな、大畑幸恵、林健太郎「アートプロジェクトによるコミュニティ生成/瀬戸内国際芸術祭 2013、沙弥島アートプロジェクトの実践による研究」、神戸芸術工科大学紀要『芸術工学』2014

8) 部分的には坂出市の公式ウェブサイトに記載された情報による確認を行っている。「坂出市ホームページ」<http://www.city.sakaide.lg.jp>、2015年8月確認。